福祉文教常任委員会　視察報告書　　令和8年8月5日（水）～8月7日（金）　山形県

福祉文教常任委員会
副委員長　北野　めぐみ

高畠町議会

「オーガニック給食・オーガニック宣言について」

・中学校においては農業生産部という珍しい部活がある。生徒が実際に農業を体験している。
　生徒と一緒に、田んぼや畑の管理を行い、収穫の喜びや食材に対する意識を学ぶことができる。
・課題は、有機米が年に3日ほどしか給食に出せないことである。
・有機農業の面積が、高齢化により減少傾向にある。

鶴岡市　社会福祉法人月山福祉会

「農福連携・就労相談窓口の取り組みについて」

・難しい点は、特に精神障がい者の方は気分により、突然に休んでしまうことがある。
・一年の中で季節的なことで、仕事がなくなってしまうことがある点が課題である。
・ハローワークに行っても就労に結びつかない人もいる。農業を好まない人もいる。
・引きこもってしまっている人たちを、どのように就労に結びつけるかが難しい。
　本人の自立にむけて、家族とのつながりを大切にしようとしている。
・農福意見交換会を開催し、障がい者や引きこもりの方との連携を蜜にしている。

鶴岡市　バーンフュージョンソライ

「農福連携と教育事業について」

・夏休みのためか、大変に大勢の子どもたちが親と一緒に、伸び伸びとが参加されていた。
・子ども自身のもともと持っている能力を引き出し、力をつけることを目的とした事業である。
・禁止するルールではなく、子ども同士で解決したり、想像力を伸ばす力を養っている。
・大人の感覚に左右されるのではなく、子どもたち自身の主体的な判断で伸び伸びと成長していく場である。
・障がい児と健常児がともに活動することもしている。自分たちが自分たちで責任を持てる社会を目指す。
・昨年より子どもは無料としたが、それでも参加できない子どもたちがいることも課題である。

酒田市議会

「不登校支援メタバース空間構築などの取り組み」

・不登校の小中学生の子どもたちが登録すると、ネットのサイトに参加し交流することができる。

・ネットのサイト画面によるやり取りのため、他の人との交流がしやすい。

・誰でも参加できることにすると、必要な子どもへの支援が行き届かなくなってしまうこともある。

・登録者が少ないために、サイトに入っても誰もいないこともある。

全体を通じて

・食の安全については、今の時代、特に大事な課題である。有機農業の必要性を強く感じた。

・成長期の小中学生にとっては、この有機栽培によるお米や野菜の給食を更に増やしていく必要がある。

・農福連携事業は、すぐには結果に結びつかないが、諦めずにかかわり続けることが大切である。

・不可能だと思われたことも、長い間積み重ねていくことにより、確実な前進を成し遂げていると感ずる。

・このメタバースの取り組みが終わった後も、切れ目のない支援のあり方を考えていかなくてはならない。
両親がいなくなり本人のみとなった場合でも、その後の継続した支援のあり方を模索していく必要ある。